

# たまのよこやま

東日本大震災  
復旧・復興支援報告Ⅱ

平成27年度企画展示  
開催中!!

## 特集 東日本大震災復旧・復興支援報告Ⅱ

平成 25 年度に引き続き、平成 26 年 4 月より平成 27 年 3 月まで 1 年間、(公財)東京都スポーツ文化事業団(以下「都財団」)より(公財)福島県文化振興財団(以下「福島県財団」)へ派遣され、復興業務としての発掘調査の技術支援を行いました。

H26 年度は常磐自動車道・会津縦貫北道路・一般国道 115 号相馬福島道路・復興基盤総合整備・県道広野小高線整備・県道北泉小高線整備の 6 事業を(図 1)、山形県 1、栃木県 2、東京都 1、大阪市 1 の各財団から 5 名の派遣職員の応援により、集中的に発掘調査を実施して、道路や農地の早期復興に努めました。

私が配属された遺跡調査部管理課復興調査 1 班は、ほ場再整備事業(土取り場)予定地内の南相馬市天化沢 A 遺跡を担当しました。東日本大震災とそれともなう大津波によって、沿岸部地域は甚大な被害を受けたため、福島県では津波で浸水した地域をかさ上げし、被災農地の再生を図る復興事業を実施しています。そのため土取り工事に先立ち、埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を行いました。調査面積は 30,200 m<sup>2</sup>、調査員 10 名、作業員 90 名(地元の方々を雇用)という体制で、平成 26 年 4 月より 12 月まで発掘調査を実施しました。

遺跡は弥生時代と奈良・平安時代が主体で、斜面には奈良・平安時代の製鉄炉跡や炭焼き窯が密集していました。弥生時代では、東京都で調査しては目にすることのできない、石包丁やその作りかけである未成品が出土しました(写真 2)。本遺跡を含む浜通り地区の製鉄遺跡は、古墳時代後期から始まり、古代・中世・近世と連綿と鉄作りが行われて来ました。いわゆる「相馬の鉄」です。鉄作りに適した砂鉄は海岸に、木炭の原料になる木材と窯を築く際の粘土は丘陵に豊富にありました。鉄作りには、砂鉄と木炭と粘土の相性が重要です。

製鉄炉は沢筋を中心に並び、合計 17 基基検出されました。「踏み鞆」が付き、箱形炉と呼ばれる製鉄炉の傍には地下式の炭焼き窯がみつかりました(写真 3)。両者はセットで操業していたと思われます。最も多く検出されたのは小形炉で、従来の豎形炉と



1 H26 年度の調査地点



2 石包丁 食べ物を切る包丁ではなく、穴を通して指をかけ、稲穂を摘み取る道具



3 調査風景 左小形炉、中央箱形炉、右地下式炭窯



4 調査風景 沢沿いの斜面に並ぶ小形炉

も箱形炉とも異なる、天化沢遺跡に特徴的な炉のようです（写真4）。鞆と炉の間には送風管が繋がれ、炉壁には高温にも耐えられる土製の羽口<sup>はぐち</sup>が差し込まれます。ここから大量の風を炉内に送るので、炉の中には木炭と砂鉄が交互に投入され、高温になると化学反応で鉄が溶けて炉の下方へ下りていきます。この際に不純物が大量に発生します。これを鉄滓<sup>てっさい</sup>（スラッグ）とよびます。この溶けた不純物は炉から何度も排出する必要があります。そのために、炉の近くにはたくさんの鉄滓が捨てられています（写真5）。

炉の底にたまった鉄を取り出すには、炉を壊す必要があります。そのため、炉の斜面下側には鉄滓とともに壊された炉壁や土製の羽口が沢山みつかります。こうした鉄滓や羽口が山になっている所は、本格的な調査をしなくとも地表面の観察で付近に製鉄遺跡があることがわかります。

平成 26 年 11 月 1 日には遺跡見学会を開催し、地元の方々に公開しました（写真6）。あいにくの雨天で現地の見学会は断念しましたが、テントの中で出土品を展示しました。

1 月より3月までは福島市内で出土品や記録類の整理作業を行いました（写真7）。出土品の一部は江戸東京博物館をかわきりに全国を巡回展示する、文化庁主催の「発掘された日本列島 2015」にも出品されています（写真8）。

通常の勤務は、月曜の朝、公用車に分乗して福島市を出発し、80km 離れた南相馬市へ向い、4泊して週末の金曜日に福島市に戻るというサイクルでした。月～木は地元の宿泊施設を利用し、そこから発掘現場に出勤しました。調査中は線量計を常時携帯し、日々数値の記録と報告を欠かしませんでした。

この1年間、古代の製鉄遺跡や弥生時代の石包丁の検出など、今後も東京では体験することのない調査ができました。また、福島県財団・県文化財課・南相馬市文化財係各職員・地元作業員、さらに県へ派遣された沖縄・福岡・高知・京都・茨城各府県とさいたま市職員との交流と情報交換も定期的に行うことができました。こうした経験や人脈を今後の事業に活かしていきたいと思います。最後に、福島の復興には継続的かつ長期にわたる支援が必要だということを付け加えておきたいと思います。

およがわ  
(及川良彦)



5 廃滓場 鉄滓・土製羽口・炉壁が捨てられ山になる。



6 雨中の遺跡見学会 展示解説（11月1日100名参加）



7 整理作業風景 土製羽口の復元作業風景



8 竪穴住居跡から出土した仏教関連遺物

新宿区四谷一丁目分室では、UR 都市機構が計画する四谷駅前地区再開発事業に伴って、昨年 11 月より新宿区四谷一丁目遺跡（新宿区 No.11 遺跡）の発掘調査を実施しています。

6 次調査にあたる今回の調査地点は、現在の本塩町から四谷一丁目地内、江戸時代には「四谷塩町一丁目」・「麹町十一丁目」と呼ばれた町屋の範囲に相当します。特に前者の四谷塩町一丁目については、次の 2 つの点で、今回の調査が注目されています。ひとつは、町全体をまるごと一度に発掘する前代未聞の調査であることです。もうひとつは、町に関わる文献史料がふんだんに遺されていることです。江戸東京博物館には、四谷塩町一丁目の幕末から明治初頭までの人別帳（戸籍台帳のようなもの）が所蔵されています（「四谷塩町一丁目」関連文書）。江戸の人別帳が震災や戦災でほとんど焼失したと言われているなかでは、貴重な資料と言えます。このほかにも、甲斐国の村名主で江戸で屋敷経営を行っていた市川家に関連する史料の存在も知られています（山梨県立博物館所蔵・市川家文書）。考古学的調査と歴史資料両方の成果から、江戸の町の具体的なありかたを探ることができると期待されています。

将軍徳川家光が行った寛永 13 年（1636）の江戸城外堀普請は、谷地形を巧みに利用して外堀を構築したことが知られています。現在の平坦な地形からは想像しにくいですが、今回の調査地一帯も元々は小さな谷を含む斜面地で、埋め立ての谷埋め盛土層が調査でも確認されています。外堀普請と前後して行われた四谷周辺の街区の土地造成によって、現在の町並みの原形となる都市の基盤が調い、以来この地には現在まで連なるまちの歴史が刻まれていきました。

これまでの調査成果の筆頭に、江戸前期の麹室群の発見があげられます。麹室は酒や味噌に用いる麹菌を培養する地下施設と考えられ、6 月 5 日時点で 8 群 28 室が隣り合って見つかっています（写真右上）。今後の調査でも増



花が咲いたように並んだ麹室群（①-1・2 区）

える可能性が高く、江戸前期に一帯で大規模な麹の生産活動が行われていたことを物語る資料と言えるでしょう。

5 月 30 日（土）、新宿区との共催により、現地にて遺跡見学会を開催しました。当日は真夏日にもかかわらず、当初の予想を超えて、1,098 名もの大勢の方々にご来場いただきました。猛暑のなかお越しいただいたみなさま、ありがとうございました！

当日は遺跡見学のほか、遺物展示コーナーでは、町屋でつかわれた焼きものや玩具や職人の道具など当時の生業や暮らしぶりをうかがわせる遺物や、約 300 年前に降灰した富士山の宝永噴火の火山灰にも触れてもらいました。JR 四ッ谷駅からほど近い都心の一等地に、こんな遺跡が眠っていたことに驚きの声もあがり、よりいっそう遺跡を身近に感じていただけたのではないのでしょうか。見学会を通じて、四谷の歴史、江戸の歴史にあらためて関心を深めていただければ幸いです。発掘調査はまだ続きます。今後の進展にご期待ください。（大八木謙司）

\* 遺跡見学会は、UR 都市機構・大成建設株式会社のご協力により実施しました。



ようこそ江戸の町屋へ！



都心にも遺跡がのこっていたんだ！

# いま あの遺跡は現在！？ Vol.5

## — 汐留シオサイト 旧新橋停車場跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。

このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。

もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

今回は近代日本の発展を支えた遺跡を紹介します。港区東新橋一丁目、現在のＪＲ新橋駅から徒歩数分の一画に、日本の鉄道発祥の地があります。1872年10月14日に日本最初の鉄道路線の起点として開業した新橋駅（初代新橋駅）です。1873年（明治6年）9月には、ここから横浜駅（現在の桜木町駅）までの間で、日本初の貨物列車の運行が開始されました。

1914年（大正3年）東京駅が完成した後は旅客駅の役割を譲り、貨物駅の汐留駅となりますが、関東大震災によって駅舎は焼失、度重なる改変と拡

張により、初代新橋駅は地中に埋もれたのでした。

発掘調査では駅舎跡の他、ターンテーブル（汽車の向きを変える施設）、プラットホームの跡が発見されました。出土遺物では、改札鉄や汽車土瓶、さらには切符、荷物札など、鉄道関連の資料が多く出土しています。

調査後、遺構は保存され、その上に当時の駅舎が復元されました。中は展示ホールとして、出土遺物が展示されている他、ガラス張りの床からは駅舎の基礎を見ることが出来ます。シオサイトの散策がてら、“鉄分”補給をするのも良いですね。（武内 啓）



写真1：発掘調査で姿を現した旧新橋駅のプラットホーム（左）と、現在の復元された姿（右）。復元された線路の始点（右写真の駅舎側）には日本最初の路線、新橋～横浜間の基点である0マイルポストがある。



写真2：旧新橋駅駅舎の遺構（左）と、その上に復元された駅舎（右）。左写真奥には、当時まだ仮駅舎だった「ゆりかもめ」新橋駅の建物が見える。復元駅舎の建物内では新橋駅の歴史を伝える資料が展示されている。設計者のリチャード・ブリジェンスがアメリカ人のためか、窓の鉄柵と庇には、トムロコシとタバコのモチーフが配されている。

今回のスタッフ紹介は警備の皆さんです。UさんとYさんのお二人が、年間を通してほぼ一日交代で勤めています。早朝、通用門を最初に開けるの



は警備の人たちです。新聞を取り込み、エレベーターを「休止」から「運転」に切り替えて、通用口の受付で出勤してくる職員を待ちます。最初に出勤してきた職員は受付で「入退館管理台帳」に名前を記入して各部屋の鍵を受け取り入室することになります。



朝、通用口受付にて職員の入館を確認  
これから、団体見学の大勢の小学生、一般の見学者、考古学関係の研究者、出入りの関連業者など、多くの人たちの来観で賑わういつもの一日が始まります。警備の人たちの仕事の第一は、当埋文センターの職員はもとより、来所する不特定多数の人たちの安全を守ることにあります。受付の人、あるいは庭



午前9時、駐車場のゲートを開ける

園で働くシルバーの人たちとも連携して、館内や建物の周囲、それに遺跡庭園内

午前9時、1階駐車場入口と2階正門、それに遺跡庭園入口の門を開

の不審者、不審物それに火の気、庭園内でのいたずらや危険箇所の発見に目を配ります。前夜、風雨が激しかった場合などには、庭園内に落下しそうな

折れ枝などがないかどうか入念に見て回ります。シルバーの人たちの勤務日以外



午前9時、遺跡庭園の門を開ける

の遺跡庭園の見回りは、基本的に警備の人たちの仕事だからです。冬場の夕暮れ、閉園後の復元住居の中にいた不審の若い人たちに注意したこともあったようです。このような館内・建物周囲・遺跡庭園の巡回は、午前・午後それぞれ一回づつ毎日実施しています。

埋文センター内各部署の勤務が終了し、最後の職員が部屋の鍵を返し退勤した後、警備の人たちの最後の重要な巡回が始まります。マスターキーを使った各部屋の見回りです。職員が勤務している間の巡回は、基本的に廊下や部屋の周囲に限定されますが、職員退勤後は各部屋の中まで入って、電灯の消し忘れ、火の不始末、戸締まりの有無などを逐一見て回ります。ただし、パソコンやコピー機などのOA機器には、仮に消し忘れがあった場合でも、手はつけないと言うことでした。過去、この最後の巡回で、気分が悪くなり蹲っ



遺跡庭園内を定時に見回る

ていた職員を発見したことが二度ほどあったようです。幸い、発見したYさんがもと消防署の職員であったこともあり、対応は迅速で、大事にはいतरなかったようです。

(福田敏一)

今を去る30数年前、当センターが「多摩ニュータウン遺跡調査会」から「財団法人東京都埋蔵文化財センター」となった頃のことです。

当時、京王相模原線はまだ多摩センター駅が始発、終着駅で、小田急多摩線も整備されていませんでした。そこから先へは一日数本のバスに乗る以外、公共交通手段はありませんでした。

昭和40年代から行われてきた多摩ニュータウン開発も、この頃には多摩センター周辺や南大沢などで大規模な工事が目立つようになり、多摩丘陵の奥深い所まで進んできたことが実感されるようになりました。実際、工事に先立って行われる発掘調査ではなおのことで、人跡未踏かと思われるような場所で調査をすることも稀な事ではありません。

今回紹介するNo.759遺跡は、幸いにも多摩センターから近く開発工事が進んだエリア内にありました。遺跡が未調査のため、工事が進まないと言い換えることも出来るのですが・・・。

昭和56年4月、職員として採用されたばかりのホヤホヤの調査員が先輩調査員、同僚調査員とパーティーを組み調査を担当しました。様々なことを学びながらも、只管毎日、土を掘っていた記憶があります。遺跡としては西向きの斜面上に陥し穴土坑や集石などが見つかり、縄文時代前期を中心とした土器や石器なども出土しており、多摩ニュータウン遺跡群では一般的な遺跡だったのですが、他の遺跡と大きく違った特徴があったのです。



遺跡の様子（北から）

いくつか検出された陥し穴土坑の内、1号土坑としたものは平面形が隅丸長方形で長軸172cm、短軸123cmと、ここまではよくあるサイズなのですが、なんと深さが258cmを測る、当時としてはビッグサイズ。しかも底部に獣骨の一部が残って

いたことにさらにビックリ。時間をおかずに著名な大学の先生に鑑定をお願いしたのですが、速報的な「おそらく鹿でしょう」というご意見を伺った後は、何もありませんでした。

土坑が構築された時期としては周辺および土坑

内出土の土器から鑑みて、縄文時代前期と考えられるのですが、獣骨が検出された位置と近いところから縄文時代草創期に特徴的な有舌尖頭器が出土して、これまたビックリ。さらに、出土状態の写真をしっかり撮影しておきながら、報告書には写真の掲載やこの石器が1号土坑から出土していることを記載していないことが判明し、またまたビックリ。いくらホヤホヤの調査員とはいえ、現在では考えられない自分のミス。反省しきりの体であります。

ただ、有舌尖頭器の出土をどのように捉えなければならないのかについては、同様な類例が少ないこと、様々な条件や状況が考えられることから、一概に「こうではないか」とは断じ難く、頭の中でグルグルと目まぐるしく空回りばかりしていたことをよく覚えています。

今になってみれば、「もう少し落ち着いてしっかり考えていれば・・・」と思えるのですが・・・。

（並木 仁）



1号土坑内有舌尖頭器出土状態（底部近く白く写る）

# 『先祖と生きる - 暮らしとお墓のうつりかわり -』にまつわる話 (そのいち)

日本の多くの家では、家族が亡くなって一定の年月、例えば 13 年や 33 年が経つと、故人の霊は個性を失って祖先一般（祖霊）になるとされています。この考え方には日本の仏教が深く関わっているのですが、しかし、仏教には本来、祖先崇拜という思想はなかったようです。一般に仏教では、この世は苦界とされ、悟りを開いた少数の者（解脱者）のみが「仏」となり、他の多くの凡人は輪廻転生（りんねてんしやう）といって、六道すなわち、天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄いずれかの世界に生まれ変わるとされています。つまり、どの世界に生まれ変わっても、他の人格に変わってしまうので、祖霊になりようがないわけです。

持統天皇の火葬に代表されるように、仏教は伝来以来、古代を通して主に上層階級に影響を与え続けますが、中世における高野聖等による浄土思想の布教や、近世における寺請制度のもと、次第に広く一般庶民に浸透していきます。特に近世は、幕府がキリシタン対策として、すべての住民に寺院の檀家となることを強制したため、仏教界のほうも庶民の間に教義を浸透させる必要から、古来広く民間に存在した祖先崇拜信仰を利用したと言われていました。



盆棚（八王子市別所 1983 年夏）

祖先崇拜の行事としては、現在では「お盆」が顕著ですが、この行事がかなり仏教色の強いものである点は周知のことです。しかし、古来日本では、祖先を祭る行事は他にも一つあったようです。『徒然草』十九段には、大晦日のこととして次のように出てきます。「(略) 亡き人のくる夜とて魂祭るわざはこのごろ都にはなきを、東のかたにはなほする事にてありしこそ、あはれなりしか」。

作者は言っています。「大晦日の夜は先祖が帰ってくるといってその魂を供養する日なのに、この習俗はもう京都では見かけなくなりました。しか

し、関東のほうではまだ行っているらしい。なんとおもむき趣のあることか」と。約 700 年前のことです。

古来日本では、先祖が帰ってくる日が一年に 2 回あると考えられてきました。ともに帰ってくる先祖を心静かに迎える日だったようですが、初秋のほうは仏教色が強くなり、初春のほうは新年を迎えるということでもかなり賑やかになってしまいました。それでも、お正月には歳神様を迎え、子供たちが親から「お年玉」をもらえる、ということでもろうじて「玉（魂）」の痕跡が残っています。

結論を先に言ってしまうと、親（特に父親）は帰ってくる祖先（祖霊）を迎える重要な響応役で、子供たちや家族には祖霊からもらった元気溢れる魂の一部を「歳魂」として分かち与え、これからの一年を充実して暮らしていけるように願った、と考えられます。暦が変わってしまった関係で、これら正月の行事は 15 日の小正月にも色濃く残っています。

さて、祖霊で思い出すのが今回の展示で語り部として登場させた「勝五郎」です。勝五郎は隣村の藤蔵が 6 歳で病死してから 4 年後に藤蔵の生まれ変わりとして生まれ、55 歳まで生きた実在の人物です。誕生については「十月十日再生」とされています（『勝五郎再生記聞』平田篤胤著）。俗に胎児は胎内に「十月十日」と言われているので、勝五郎の母が懐妊したのは元旦ということになります。

勝五郎は藤蔵として死んだ後、「白髭の翁」に伴われてあの世を散策しつつ、ついに「あれなる家にて生まれよ」と指示されるのですが、この「白髭の翁」は祖霊もしくは村の産土神と考えられます。そうすると、勝五郎は大晦日に歳神様として帰ってきた祖霊もしくは産土神の落胤あるいは化身ということになりそうですが、どうでしょうか。

勝五郎の誕生日に関しては、これを記録した平田篤胤が熱心な国学者であったことを考慮する必要があります。しかし、同時代の別書『勝五郎再生前生話』（池田冠山著）。にも「十月十日生」とあり、あるいは事実であったのかもしれませんが。（福田敏一）

